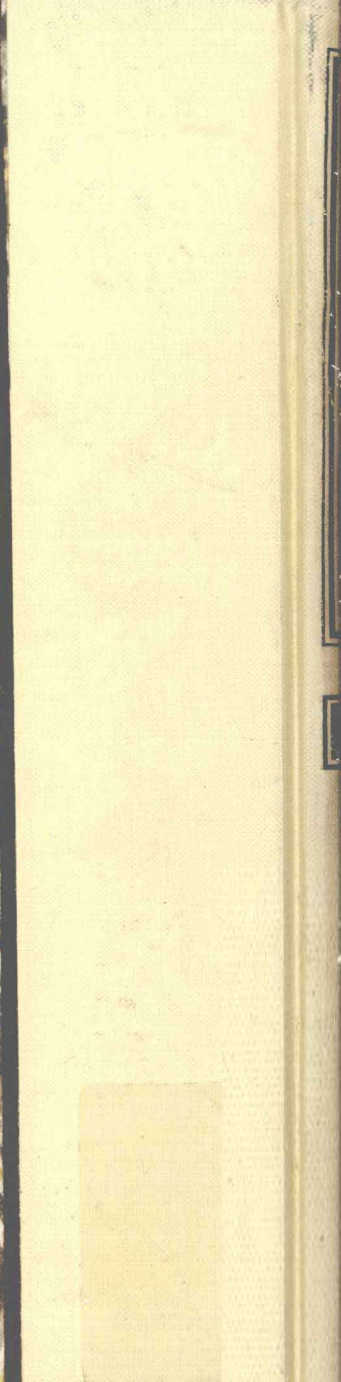




現代隨想全集

28

小宮豐隆
岸田日出刀
柳宗悅
集

東京 創元社 刊

現代隨想全集

第二十八卷

昭和三十年四月二十五日 發行

定價 三八〇圓

著者

小宮豐隆
岸田日出刀
柳宗悅

發行者

東京都新宿區新小川町一ノ一六
小林茂

印刷者

東京都港區芝新橋四ノ三八
島田耕三

發行所

東京都新宿區新小川町一ノ一六
株式會社 東京創元社
電話九段四二三八・四二二九
振替東京四一二四七

印刷 島田精版・製本 小高

萬一落丁亂丁本がありましたら取替えます

現代隨想全集
第二十八卷

目

次

小宮豐隆集

藝道の祕傳	二
芭蕉の俳句	三
特殊と一般と	吾
グロテスケ	毛
富本豊後大掾日記	空
御國淨瑠璃	允
大償の神樂	夾
栗原神樂覺書	二四
年譜	三〇
解説	三七
古川久	

岸田日出刀集

東京再建	二三
敗戦時感	二四
水洗便所	二五
京都御所	二六
すまひの和洋	二七
窓	二八
厠史考	二九
兼好の建築觀	三〇
潔齋	三一

打つてがへし……………二六

打つてがへし後日譚……………二九

忘れられぬ旅……………三三

旅雜感……………三三

郵便碁……………四二

ペレー帽……………四四

ラウドスピーカー……………四七

クリスマス……………五〇

釣りのたのしみ……………五三

島原の角屋……………五五

年譜……………六〇

解説……………谷口吉郎…二二

柳 宗 悦 集

民藝の立場.....	二九
ヴァチカンの本堂とカルチェリーの僧庵.....	二九
國際工藝家會議.....	二九
米國の旅.....	二九
機械文明と自然へのあこがれ.....	二九
陶器熱の流行.....	二九
東洋的な美への關心.....	二九
サンタ・フェーにて.....	三〇
山陽隨筆.....	三四
書 道.....	三四
手仕事.....	三六

試験所	三六
土瓶の注口	三〇
臺所	三三
自由形	三四
女の服装	三六
グロピウス	三九
リーチ	三二
モリスと民藝運動	三二
山	三四
上高地の額	三六
エベレスト	三八
林檎	四〇
宣教師の食卓	四二

祈らずとて	三四
叩けよ、さらば	三五
法華經	三七
東洋的確心	三〇
眞宗素描	三三
新しさについて	三八
マリア像	三九
蒐集の辯	四四
年譜	三四
解説	四三
村岡景夫	

小宮豐隆集

藝道の祕傳

日本の過去の藝術は祕傳の鈴なりと言つていいくらゐ、いろいろな祕傳がある。然もこれは過去の藝術のみではない。今日でもこの制度は方に生きてゐて、祕傳だとか、口傳だとか、口訣だとか、傳授事だとか、重き習ひ事だとかいふ名前で、多くの場合、それを教へる人、即ち師匠の收入の方便になつてゐるのであります。

私は大學を出立ての時分、謡を教はつたことがあります。その時私は師匠から一枚の刷物をもらひました。それには百番だつたか二百番だつたかの謡曲が、全部十二箇月に分類され、一月は何の曲、二月は何の曲といふふうに、澤山の謡の名前がそれその月に配置されてゐました。そのお仕舞の方に、五段だつたか六段だつたか忘れましたが、ともかく何段かに順序をつけて、この曲が上がつたらこれ、これが上がつたらそれと、習ひ物の名前が刷つてありました。最後はたしか重き習ひ事之部といふのだつたと思ひます。これは重いものの順に書いてある名前で、曲が重くなればなるほど、それを教はるのに、年數もかかれれば金もかかるといふことになつてゐるもののやうでした。

これは謡曲のみではないのです。長唄、常磐津、清元は無論のこと、茶でも活花でも、かういふものを習ふには二十圓出さなくてはならない。かういふものを習ふには五十圓出さなければならぬといふふうに、それそれ段階が設けてあつて、物によつては随分澤山の金を出さなければ、てんで教へてもらへないものもあるやうであります。私の知つてゐる奥さんの中に、ついこのあひだ五十圓だか

百圓だか出して、或流儀の活花の傳授を受け、その家元からお師匠さんになつて看板を掲げる許可を得た方がありました。これは或は舞踊とか邦樂とかの傳授料に比べれば、大變安い傳授料なのかも知れませんが、ともかくかういふ祕傳とか傳授とか口傳とかいふものは藝術に於てどういふ意義があるものであるか、——例へば、さういふ制度は藝術の進歩を阻害するものだから、全然破棄してしまふべきものであるか、それともこれは何等かの意味で藝術の進歩に必要なものであるものだから、保存すべきものであるか、さういふことを考へてみようといふのが、この講演の主意であります。

祕傳とか口傳とかいふものが、日本の藝術に於て、およそいつごろから始まつたものであるかといふ問題は、私にはまだ十分調べがついてをりません。従つてその史的發展の考證は、ここでは申上げないことにします。ただここに「瀉瓶」といふ文字がある。これは「シャビヨウ」と讀むのださうで佛語で、佛敎の方では、自分の持つてゐるものを残るところなく相手に傳える、——この瓶の水を、瓶を逆さまにして、底の底まであけて、別の瓶に注ぎ込むやうに、自分の持つてゐるものを残るところなく相手に傳へることを、「瀉瓶」と言つてゐる。誰それは誰その「瀉瓶の弟子」だなどといふ言葉もある。かういふ言葉が『古今著聞集』などでは、佛敎を離れて、琵琶のやうな樂の祕傳を人に傳へるやうな場合にも用ひられてゐる。「後鳥羽院はかの卿に御琵琶ならはせ給ひて、既に瀉瓶せさせ給へきに成にける時」などといふのが、それです。祕傳といふやうなことは或は佛敎——密敎が日本に入つて來てから、特に結晶した思想で、それが段段藝術の方面にも瀰漫したものではないかと想像するのでありますが、先程申しましたやうに、歴史の方面は十分調べが行届いてゐませんので、あまりはつきりした物の言ひ方は眞まなくてはならないわけであります。

日本には既に古い時分から、神樂とか催馬樂とかさういふ謠ひ物の方面や、舞樂などの舞もしくは

樂の方面には、よく祕傳とか祕曲とかいふものがあつて、なかなか人に教へない。或人はそのため病氣になつて、飯も何も喰はずに段段瘦せ衰へて、命が旦夕に迫るといふやうな話がいくつもあります。そこへお師匠さんがやつて来て、ちつとその男の顔を見て、ああ、これなら何も心配なことはない、早く飯を喰はせるがいい、これは琵琶の祕曲が教はりたいたからの病氣だといふので、うちの者に飯の用意と琵琶の用意とをさせる。師匠が祕曲を教へてくれると聞いて、枕も上がらなかつたその病人は、いそいそとして起き上がり、お茶漬を喰つて、さうしてそのお師匠さんから祕曲を傳へられたといふのであります。

これも琵琶の方の話であります、例の謡曲などで有名な蟬丸は、實は式部卿の宮の雑色なのさうであります、これが式部卿の宮の琵琶をお弾きになるのを常常聽いてゐて、自分も微妙に琵琶を弾いた。琵琶の方には流泉啄木の曲といふ非常な祕曲がある。それを蟬丸は式部卿の宮から傳へられてをつた。博雅の三位といふのは、その式部卿宮の子だつたが、流泉啄木の曲が蟬丸一人に傳へられ、然もその蟬丸は盲で、會坂の關に庵室を設けてたつた一人で住んでゐるのだから、祕曲はいつ絶えるか分からない。それでどうかして蟬丸からそれを教はりたと思ふが、蟬丸のところへ行くわけにも行かないといふので、京へ呼び寄せようとしたが、蟬丸は決して出て來ない。仕方ないから自分で毎晩のやうに、會坂の關まで出かけたが、蟬丸は一向その曲を弾く景色がない。到頭三年間通ひ續けたら、その三年目の八月十五日に、蟬丸が琵琶を弾きながら、歌を詠み、かういふ晩にこそ心得のある人が來てくれたら、さぞ嬉しからう、物語もしようものと獨言をいふのを聽いて、博雅の三位が自分ばかりかういふ者で、かうかういふ目的で三年間毎晩ここに來てゐる者だと言つてはひつて行く。そこで蟬丸がその祕曲を授けるといふ話もあります。

或はまた新羅三郎義光が奥州の義家のところへ戦の手助けをする爲に、都を抜け出して行く時の話もあります。新羅三郎義光は豊原時元の弟子で、時元から笙の祕曲を授けられてゐた。時元の子に時秋といふのがあつたが、時秋の小さい時分に時元は死んだので、時秋はその祕曲を傳授してもらへなかつた。それで時秋は義光に、それをどうしても傳授してもらひたいといふので、京を抜け出して行く義光の跡を黙つて追つ掛ける。途中で義光が度度歸れといふけれども、どうしても歸らない。ただ何も言はずに、いつまでもあとについて行く。到頭足柄山まで来て、義光は、これは命にかへても、笙の祕曲を教はりたないので、こんなに自分の後について来るのだなと氣がついたので、足柄山の山の上で人拂ひをして、盾を二枚敷かせ、一枚の盾には自分が坐り、一枚の盾には相手を坐らせ、お前は笙を持つてゐるかときくと、持つてゐますと言つて、懷から笙を出した。そこで自分が時秋の親爺から傳へられた、時元自筆の祕曲の譜を前に置いて、それをすつかり教へた上で、これでお前はもう歸れと言つて歸してしまふといふ話もあります。

一番初めの話は、後鳥羽天皇の御時のことであります。新羅三郎義光の話は、永保年中といふのだから、白河天皇の御時のことであります。蟬丸は醍醐天皇の御子式部卿の宮の雑色だとなつてゐますから、まづ今日から千年ぐらゐ昔のことだと言つてよろしいでせう。かういふふうには祕傳のことは随分古い時分から、日本に存在してゐたのですが、然しかういふ祕傳とか傳授とかを最も有名にしたものは、古今傳授と稱せられる傳授事だつたのではないかと思ひます。同時にかういふ祕傳とか傳授とかを最も一般的なものにしたものは俳諧に於ける祕傳とか傳授とか口訣とか奥儀とかではなかつたと思ひます。それでまづ古今傳授のことをざつと申上げ、それから俳諧の方の傳授に就いて簡單にお話をし、さうして先へ進むことに致します。